W.von Humboldtの「個」の視点について

八　木　浩　雄

はじめに

フンボルト（Karl Wilhelm Freiherr von Humboldt：1767－1835，以下フンボルト）の思想を考える上で，「個die Individualität・das Individuum」としての人間理解そのものについての指摘は，これまでのフンボルトについての先行研究によって，かなり明らかにされている[1]。また，フンボルト自身「個」としての人間または「人間」という存在にとっての「個（個別性）」についてのこだわりは，彼の著作を通し多くの研究者が強調するところである。

一方で，「個」としての人間存在を強調する上で用いる対概念として，「民族・国民」時に「国家」を「全体das Ganze・die Totalität」的なものとして取り上げている。目下フンボルトの人間形成観について研究を進めている論者にとって，彼の著作に挙げられるこれらをどの様に概念規定するか苦慮を強いられることが度々ある。しかし，人間形成観を探る上で彼の「個」についての認識が如何なるものであったかをある程度整理しておく必要があるだろう。

フンボルトの思想に注目し，彼の生涯へ目を向けると「その多彩な行動を貫く一筋の志操が感じられる」[2]一方で，彼に影響を与えた思想・哲学の多様さが目立ち，彼一個人の思想を明らかにする上では難解さを含んでいる。自らの邸宅テーゲル宮殿Schloß Tegel内に多くの古代ギリシア・ローマ時代の彫刻を配す程に古代ギリシア芸術を愛好し，その古代ギリシアより理想の人間の在り方を導き出したフンボルトは，単に古代への傾倒を示すだけでなく，当時のドイツの諸思想との融合も自らの内面で行った。その背景としては，当時彼の生きた時代が，哲学分野では啓蒙主義からカント哲学の発展を孕んでおり，文学では疾風怒濤Sutrm und Drang時代からシラー（Johann Christoph Friedrich Schiller：1759－1805，以下シラー）・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe：1749－1832，以下ゲーテ）らの時代に亘っており，政治的には（プロイセン＝ドイツでは）啓蒙専制時代からフランス革命の衝撃・ナポレオン（Napoléon Ⅰ：1769－1821）の台頭とその反動の時代へと，あらゆる面で変化流動の激しい様相を呈し，その渦中の人物であったことが先ず挙げられる。同時に，フンボルトはそれら各分野の動きにただ受身でいるのではなく，直接そして積極的に関わる位置におり，その中で自らの思想形成に努めていた[3]。

以上のように，フンボルトの思想について研究を進める場合，彼自身が生涯自己形成の過程にあり，またそれぞれの時期に思想形成の転機となる要因が随所に見られることを十分踏まえた上で，論考を行うことが求められてくる。時として，フンボルトの思想が時期によって変化していることが明らかにされるかもしれない。

しかし，フンボルトの人間に対する「個」の認識は先述した「一筋の志操」に含まれる

観点であるように思われる。

本論では，フンボルトの思想の上でひとつのキーワードとして挙げられる「個」についての視点について，彼が「個」としての人間を重視するに至った過程とその「個」の位置付けに如何なる意味を持っているかについて論考を進めてゆきたいと思う。

1．論考にあたって—参照文献とその扱いについて—

本論文に於いて取り上げる「個」については，フンボルトの『カヴィ語研究序説』[4]の中の第八節（「個人と民族・国民との間の協調作用Zusammenwirken der Individuen und Nation」）と第九節（表題なし，前節の続き）の内容に注目して論考を進めた。

この『カヴィ語研究序説』は，「一八三〇年の夏頃から，ジャワ島の古い雅語であるカヴィ語の研究に着手し，一八三五年四月八日に永眠する直前まで筆を執り続けた」[5]フンボルトの『ジャワ島におけるカヴィ語について（Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java)』の研究論文の「序説」にあたる部分が一個独立してまとめられたものである。今日言語学研究の分野に於いて，この『カヴィ語研究序説』は「内容的にも，特に前半部分は単なるカーヴィ語研究の〈序文〉の域をはるかに越えたもので，いわばフンボルトの言語研究そのものの序文というか，むしろ本文であると言っても言い過ぎではない内容になっている」[6]と理解され，フンボルトの言語論を研究する上での基礎的な位置付けを占めている。
しかし，カヴィ語研究に関する論文のほとんどが，フンボルトの没後，未整理であった原稿がまとめられ出版されるに至った経緯を持っている為，フンボルトの一貫した論理性を探る上では若干制限されているのも事実である。未整理であった原稿の監修は，フンボルトの弟アレクザンダー（Friedrich Heinrich Alexander Freiherr von Humboldt：1769—1859）とブッシュマン（Johann Karl Eduard Buschmann：1805—1880）によってなされ，その際序説の部分には『人間の言語構造の相違性と，人類の精神的展開に及ぼすその影響について（Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwickelung des Menschengeschlechts)』と表題が別に付された。それは，「この『序説』が単なる『まえがき』にとどまるものではなく，まとまった一箇の『言語論』ないし『言語哲学』の書と見做し得る内容を備えている」[7]為であり，フンボルトが未完でありつつもその思想がまとめられた書として形作られている為であった。

以上の経緯から『カヴィ語研究序説』は，フンボルトの体系的な思想理解には限界があると予想されるが，一方でフンボルト自身が同研究を手掛けた時期に注目すると，彼が研究一筋に没頭した時期であったことが注目される。

既に，教育行政・外交活動など種々の政治活動を引退し，また彼の思想形成に多くの示唆を与えた旧知の人々がほとんど死別し，まさに自らが「孤独」でありながら「自由」の身となった中で手掛けられた研究こそがカヴィ語研究であった。『カヴィ語研究序説』は，単なる言語研究としての域に止まらず，フンボルトの歴史認識・人間観を併せて論述する意図が盛り込まれており，特に本論文で対象とした第八節から第九節の中ではそれらが取り扱われている。同書の研究の時期として，フンボルトが自らの研究に没頭した時期であること，公務また私的な交流から離れた中で進められた彼の思索の環境は，フンボルトの

思想がある程度まとめられたものであると判断することができる。

未完である為か論としての一貫性には限界があり，各節を通して全体像を明らかにすることは困難の様相を呈している。そこで，「個」についての視点を明らかにするにあたっては，他の節を必要に応じて参照するとともに，これまで論者がフンボルト研究で拠り所とした新人文主義思想の立場との比較をもって補ってゆくこととしたい。

2．フンボルトの「個」についての認識

フンボルトが人間という存在を考えるとき，最も重要視する点は「個」としての認識である。その「個」としての人間は，内的に自由な創造性・活動性を有し，それらを駆使することが自己形成へと繋がり，人間の本質として位置付けられている。

嘗てフンボルトは，プロイセンの教育改革に携わった際，新たに創設されるベルリン大学の理念的構築[8]を行った。それは，「学問を学問として追及するWissenschaft als solche zu suchen」大学の下，「孤独と自由Einsamkeit und Freiheit」な存在であるそれぞれの「個」人は，大学という存在を通して「普遍」・「統一」化され，やがて（それぞれ「個」として存在する）大学も，より大きな国家・民族・人類として普遍性へ向かう統一の方向性を示し，結果として「個」としての人間存在の尊重を明らかにした。

しかし，今日当然として扱われる人間の「個」としての認識は，当時のプロイセンは王政下であり，またナポレオン戦争の反動が強い時代であり，必ずしも基層となる思想であるとは言い難い時代であった。フンボルトが教育改革に携わっていた当時，「個人の人権の擁護と言論の自由とを最高の原理とするフンボルトが，新聞や出版の検閲の責任者となるとは正に皮肉の極みであるが，彼は現実に可能な限り，自己に忠実であろうとした。＜略＞検閲を簡素化し，やむを得ず検閲を行うにしても，政治的な出版物のみに限定しようとしたが，国王や宗教界からは強い反撥を受けた」[9]状況などは，彼の思想の中核にある「個」人へのこだわり（それに伴う自由の尊重を含む）と，それが未だ時代として受け入れられ難い認識であったことを顕著に示す一例であったといえよう。

フンボルトの明らかにしたベルリン大学創設の際の理念構築，またそれに先立ちフンボルトの「個」としての人間存在の尊重の立場を明確にした『国家機能限界論』[10]に於いても，「個」としての人間存在の自由な活動性を支える上で「国家」―即ち「個」に対する「全体」―の関与を極力控えるべきとの主張がなされている。

これらの中で扱われる「個」としての人間は，第一義的な意味を持ち，「個」の存在から出発し演繹的に「全体」への方向性が示されている。

しかし，フンボルトにとって何故人間が「個」としての存在から始まるのかについては，はっきりしないものがある。彼が何故「個」としての人間を第一義的な位置付けとするに至ったのか，その思考過程を明確にしなければ，より「個」としての人間の理解，また「全体」的なものへの普遍化の道筋を具体的に理解することは不可能であるといえよう。フンボルトにとっての「個」としての人間の認識は，単なる思弁的な戯れではなく，本質として現実化されるものでなければ意味を成さないものである。

「個」としての人間認識の過程を探るにあたっては，フンボルトの生涯に注目し，彼が

如何なる思想形成を為して来たかを踏まえることによって明らかにすることができると考えられる。以下では先ずフンボルトに於ける「個」の認識が，如何なる思考過程を経て為されているか探ってゆきたいと思う。

フンボルトが人間を「個」として扱うに至った観点，即ちその基本姿勢を形作るものは，彼の自己形成の中で育まれた歴史認識に負うところが大きかったといえる。即ちそれは，新人文主義思想に於ける古典研究とその際の手法である。

新人文主義思想は，古代ギリシア世界を研究することにより人間としての理想像を読み取り，それまでフランスから影響を受けてきた啓蒙主義思想の分析的な人間理解に対して，ありのままの人間像を受け入れ理想の人間像へ陶冶の途を探る教育思想として，ドイツを中心に発展した。理想的な人間の形成を探る上で重視されたものは，その人間の内面性であり，その内面性から顕現する生の表現であった[11]。内面からの生の表現，それは同じ新人文主義者であるヘルダー（Johann Gottfried Herder：1744－1803）やゲーテ・シラーらの活躍する文学運動疾風怒濤の視点とも一致する。

この新人文主義思想に於ける古代研究は，専ら粗読や広範な歴史の構成要素の把握によって導き出される原理としての歴史理解の視点を確立させている。「フンボルトは人間の諸能力の全体性と普遍性を考え，人間はより高い度合いにおいてまた理性をもつよりも以前に，欲求，身体，感性，本能，激情，空想，予感などをもっており，そして理性をも含めたそれらすべてのものが，初めて『人間性』を形成するのであると考えた」[12]とするその視点は，人間に関わるもの全てを見渡した上でその本質へ迫る姿勢の結果であると見做すことができる。

また，「当初その新人文主義形成の過程から，ギリシア古典の粗読による本質理解と，それらの歴史的原理からの理解を境に前期と後期に分けられる場合があり，特に後期新人文主義に於いては「個人」から「国民」「民族」「人間」としての普遍性の理解へ発展する契機を見せる」[13]発展形態そのものも，フンボルトに対しての影響は大きいものであった。こうした古典研究の手法を学んだフンボルトにとって，広範な古代からの世界史理解と，その上で導き出される歴史原理によって，「個」としての人間が第一義な認識に至るのは想像に難くない。

フンボルト自身は，新人文主義の見出した古代ギリシアへの回帰により理想的人間像を見出す一方，その理想的人間が如何なるものであるかを追求した思考の方法を自らのものとし，「個」としての人間追求へ結びつけたのではないかと考えられる。『カヴィ語研究序説』に於いて見られるフンボルトの考察姿勢は，「今日における人間の内面形成を政治，芸術，学問の立場からそれぞれ仔細に考察してみると，さまざまな原因と結果とが相互に制約し合いつつ，何十世紀にもわたる長い因果関係の連鎖を成していることが理解されるのである」[14]といった広範な把握のもとで進められている。

新人文主義思想の系譜の中でも，後半に位置するフンボルトは，その集大成として「人間性の一次的な表現としての『人間』的な大宇宙，言ひかへれば歴史の世界が前景に立つてゐる」[15]視点を確立させた結果とまとめることができるであろう。

フンボルトが第一義的に取り扱う「個」としての人間存在，それは歴史という「全体」

性の中に光る個々の人間存在を認識することによって結果的に浮かび上がった帰結点であったといえる。

3．人間の「個」と「全体」性の関係について

前節では，フンボルトが新人文主義的視点に従い，古典の粗読に拠る内容把握や原理としての歴史認識の手法によって，世界史という「全体」的な枠組みの中で見出される人間の存在に注目し，結果「個」としての人間把握へ認識が至った点について明らかにしてきた。

この「個」としての人間より演繹的に描かれる「全体」への指向または普遍化は，これまでフンボルトが明らかにしてきた見解ではあるが，一方でその「個」としての人間を第一義的に位置付けるに至った経緯に注目すれば，逆に歴史という普遍的世界―即ち「全体」―から導き出された帰納的終着点としても位置付けられるものであったことがいえる。つまり，人間の本質を探る上でフンボルトが見出した回答は，「個」としての人間こそが（演繹的または帰納的に考察しても）疑い得ないものとしての認識だったとまとめることができる。

フンボルトの「個」としての人間の認識を探ることによって，上述の経緯の結果とは別に第二の特質が明らかになってくる。それは，人間を認識する上での「個」と「全体」的なものとの関係性が如何なるものであったかということについてである。そこで本節では，「全体」の中で浮かび上がった「個」について，「個」と「全体」の両者が如何なる関係を持っているかについて論考してゆきたいと思う。

先述したフンボルトの大学論の中で見られた「個」と「全体」の関係は，「個」がやがて「全体」へ普遍化され統一化されるものであったが，前節で論考した「個」の認識の過程に於いては，「全体」の枠組みより「個」としての存在の重要性が導き出される経緯が，彼の生涯―即ち新人文主義的視点の形成―に注目することによって明らかにすることができた。

以上の視点に従うフンボルトは，人間を考察する上で「個々の人間は，誰でも常に何らかの全体との関わりを持っている＜略＞つまり，個人個人の生は，どういう側面から考察しようとも，必然的に社会性と結びつかざるを得ないもの」[16]と歴史原理の視点に立ち，「個」でありつつも現実として「全体」的な枠組みの中で（人間は）存在し得るものとして認識している。

これは，人間の本質として，「個」としての人間の認識だけでなく，人間の「全体」としての認識も不可欠であるということを同時に意味している。換言すれば，「個」としての人間の認識は，同時に「全体」の中に含まれる存在（必ずしも構成要素という意味を含んではいない）として，コインの表裏の如く相対的に捉え，また本質的に人間は「個」であり且つ「全体」性でもあるとの両義性を含んだものとして把握されなければならないとの意味を暗に含んでいると考えられる。フンボルトの言葉を借りれば，「排斥的な個性もいくつか集って結合すれば，結局一つの全体を形成することになるという全体性の原理によって

導かれている」[17]と換言することもできよう。

フンボルトによって「全体的なものだけが，個別的なものの力を強め，その活力を鼓舞することができるものである」[18]との指摘がなされているとおり，現実的には「個」としての人間の認識に重きが置かれているのは事実であるが，人間としての本質の意味では両者は同位に扱われていると見ることができる。

「個別者〔個人・世代・民族など〕の活動の及ぶ範囲というものは，常に限定されており，分断されたものでしかないが，しかし，打ち見た限りでは，人類全体の活動と全く同じ方向を辿っているように見えるものであるし，また事実，ある程度までは正にその通りであると言ってよい」[19]との認識は，まさに歴史原理に基づくフンボルトの視点によって明らかにされたものである。

以上より，フンボルトは人間の本質としては，「個」としての認識と「全体」としての認識は同位にあると見做していたのではないかと考えることができる。

おわりに

フンボルトにとって「個」と「全体」の問題は，人間の本質・歴史の原理より認識する限りに於いては，全く同質のものであったのではないかと結論付けられる。

しかし，現実としてその「全体」を構成するものが，それぞれ自由な活動を性質として持つ「個」人である時，フンボルトは当然の帰結として「個」人の活動の可能性が拡大される途を探る指向へ目を向けたといえる。

教育として「個」を考える場合，より具体的な「国民・民族」としてあるべき方向性を含んだ全体性・普遍性を求めると捉えがちだが，本論で取り扱った『カヴィ語研究序説』に於いて，またフンボルトが研究対象として注視した際の人間存在の上では，「個」が如何なる形で「全体性」と結びつくかは問題外であったように思われる。寧ろフンボルトにとって重視した点は，人間という存在は「個」であり且つ「全体」であるということを，歴史的原理の中から理解し，その認識の限りに於いて，両者が本質的にどう関係してゆくかを問うことが大切であったのである。

また，フンボルトが問題視したのは，「個」の存在が自由な創造性を備える存在である点に於いてのみこだわりを見せており，そうした存在は結果としてより大きな「全体」としての枠組みに収められ，またその「全体」と「個」がそれぞれに関連し合うと考えていた。「世界史という構造・組織を取って見ると，少なくとも人間の内面に関する限りは，お互いに交錯し合いながらも同時に絡み合っている〔合一および離反という〕二つの相反する方向を，それぞれ経とし緯として織りなされていることに気づくのである。」[20]

それは，古代ギリシア世界で感動した個性的創造力の結晶といえる芸術作品など具体的なものに止まるのではなく，それらをより突き詰めて導き出した原理としての人間の「個」性と「全体」性―生の表現と文化・文明としての発展―へ価値を見出したとも換言できるであろう。

「ギリシア研究は全ての人間を結び合わせるし，人間をしてより偉大なより高貴な人間

にする。この人間は知的能力の強いことと道徳的能力の善，及び美的能力の刺激性と感受性とを同時に備えている。」[21]古代ギリシア人を偉大な「個」性として見たフンボルトの視点は，人間という「全体」の理想形として昇華させ，やがて自らドイツ人としての「個」性の可能性へ期待を向けるに至っている。

「人間と社会とのかような関係からして我々は個人と社会とがその本来の姿においては決して矛盾対立しないことを認めなければならない。社会は人格の完成に必要である。」[22]とは田中耕太郎の言葉である。ここで言う「社会」とは，「個」人に対する「全体」を意味している。

今日日本の教育の場に於いて，思想の意義が知識としてではなく人間形成に必要不可欠の問題としての議論が乏しくなって久しいとの意見を度々耳にするが，当初（戦後日本に於いて）その重要性が認識されていたことは事実であった。

以上の背景を考える時，嘗て日本が西洋に学んだ思想の本質が一体何であったのか，当時の思想家の生涯を通して理解し，検討し直す必要を改めて感じさせられるように思われた。

注　記

1　「フンボルトは個体的理想を理念として有していた。」
（H．ノール『ドイツ精神史ーゲッチンゲン大学講義』（O．F．ボルノー・F．ローディ編 島田四郎監訳）　玉川大学出版部　1997，146頁）。

2　亀山健吉『言語と精神ーカヴィ語研究序説』　法政大学出版局　1984，670頁。

3　「彼（フンボルト）は形式的な意味における言語学者ではなかった，彼はカントからシラーを超えてシェリングに至るまでのこの偉大な時代の哲学思想を一緒に考えることによって，彼は自ら偉大な思想家であった。」（F.Blättner『西洋教育史』（中森善治訳）　新光閣書店　1968，209頁）。

4　本文中にて説述してあるとおり，『カヴィ語研究序説』との表題は正式名称ではなく，フンボルトの『ジャワ島におけるカヴィ語について（Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java)』の「序説Einleitung」に対する総称である。また「序説」そのものは後に『人間の言語構造の相違性と，人類の精神的展開に及ぼすその影響について（Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwickelung des Menschengeschlechts)』との表題が付され刊行されている。しかし，紙面の制限上同書を指す場合は，『カヴィ語研究序説』と統一しておきたいと思う。
また，同書の邦訳に於いては，先行研究である亀山健吉『言語と精神ーカヴィ語研究序説』での訳文に従ったが，原書としては亀山の扱ったアカデミー版の『フンボルト全集』ではなく，Wilhelm von Humboldt, WERKE IN FÜNF BÄNDEN, Bd. Ⅲ（Wissenschaftliche Buchgesellschaft 6. Auflage 2002）を参照した。

5　同前書，「解題」X頁。

6　麻生健『ドイツ言語哲学の諸相』　東京大学出版会　1989，88頁。

7　前掲書『言語と精神ーカヴィ語研究序説』，「解題」XI頁。

8 W. von Humboldt , Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin
(「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」) 1809乃至1810年に書かれたと伝えられる。

9 亀山健吉『フンボルト―文人・政治家・言語学者―』中央公論社 1978, 129頁。傍線は論者による。

10 W. von Humboldt, Ideen zu einen Versuch, die Grenzen der Wirklichkeit des Staats zu bestimmen. 1792

11 「古代ギリシアにおいてのみ，われわれは他の所では全く求めることのできなかったもの，すなわち真の人間性にまで完成された品性の基礎をなすところの国民と国家をみるのである。……ギリシアにおいてのみ，われわれに有機的な国民教育の生きた模範が与えられる。いったい近代民族のどこにこれに似たものを見出し得るだろうか。その文化を内面的な力から獲得した民族がどこにあるだろうか。」(前掲書『西洋教育史』, 209頁)。傍線は論者による。

12 前掲書『西洋教育史』, 210頁。

13 拙著「W. von Humboldtの大学論について」 明星大学教育学研究紀要第19号 2004, 105-114頁。
尚，同論文にて「粗読」が「素読」と誤記してしまった為，訂正（太字）をして引用した。

14 前掲書『言語と精神－カヴィ語研究序説』, 21頁（「人間の発展過程の一般的考察Allgemeine Betrachtung des menschlichen Entwicklungsganges」より)。傍線は論者による。

15 篠原助市『獨逸教育思想史 上巻』 創元社 1947, 289頁。

16 前掲書『言語と精神－カヴィ語研究序説』, 57頁。

17 同前, 36頁（「精神の非凡な力の及ぼす影響－文明, 文化, 教養Einwirkung ausserordenlicher Geisteskraft Civilisation, Cultur, Bildung」より)。

18 同前, 58頁。

19 同前, 48頁。

20 同前, 50頁。

21 前掲書『西洋教育史』, 209頁。

22 田中耕太郎『教育基本法の理論』 有斐閣 1961, 83頁。

参考文献

- Wilhelm von Humboldt, WERKE IN FÜNF BÄNDEN, Bd. I , Bd. III
  (Wissenschaftliche Buchgesellschaft 6. Auflage 2002
- H. ノール『ドイツ精神史－ゲッチンゲン大学講義』(O. F. ボルノー・F. ローディ編 島田四郎監訳) 玉川大学出版部 1997
- 亀山健吉『言語と精神－カヴィ語研究序説』 法政大学出版局 1984
- F. Blättner『西洋教育史』(中森善治訳) 新光閣書店 1968
- 亀山健吉『フンボルト―文人・政治家・言語学者―』中央公論社 1978
- 篠原助市『獨逸教育思想史 上巻』 創元社 1947

・ 麻生健『ドイツ言語哲学の諸相』　東京大学出版会　1989
・ 田中耕太郎『教育基本法の理論』　有斐閣　1961
・ 江島正子『フンボルトの人間形成論』　ドン・ボスコ社　1996